

妻と二人で王寺・明神山に

2022年12月12日(月)晴

朝から、妻に「葛城山に登るので、近鉄尺土駅まで送ってくれないか」と頼むと、一旦オーケーしたのちに、「明神山と一緒に登りたい」と逆提案してきた。両膝人工関節置換の手術を受けて、まだ万全とは言えない私を、単独で葛城山に行かせるのに不安を感じたのだろう。

しまった！カメラが作動しない

妻の運転する車で、王寺町明神4丁目の「明神山駐車場」に。10:10 出発。団地内の坂道をしばらく上ると、「明神山ハイキングコース入口」に到着。路傍に植えられたスイセンが花を咲かせている。写真を撮ろうとカメラを構えるが、電池切れで動かない、事前の点検を怠った事を悔いるが後の祭り。残念ながら今回の記録には、私の拙文よりもはるかに説得力のある画像がないことになった。ご容赦ください。



↑奈良文化会館での美術展で妻。山の絵3点は妹・京子の作品

励ましあいながら歩いた一時間

頂上への道は、雑木林の中の広い舗装路、幾組かの人たちと行きかい、幾組かの人たちに追い抜かれながら、ゆっくりと上っていく。二人でこのように歩くのは昨年2月に桜井市の音羽山・観音寺を訪れて以来だ。「しんどくなったら途中で引き返そう」と確認していたが、何回か“立ち止まり休憩”をしながらも、一時間かけて山頂にたどり着いた。標高 273.6m。



改めて妻の粘り強い歩きに感嘆。

双眼鏡備えた立派な三つの展望台

頂上は広場になっており、休憩舎、ベンチ、そして各方面ごとに展望デッキが設けられている。各デッキには大型写真に山名、地名入りの解説パネルと無料の双眼鏡が取り付けられており、それを見ながら「地名・山名の同定」を楽しむことができる。妻が双眼鏡で明石海峡大橋や淡路島を確認。

大和盆地を取り囲む青垣の山々

東方面デッキからは大和平野が一望のもと。約1300年前に書かれた古事記に「大

↑今夏 二上山馬の背で

和は国のまほろば、たたなづく青垣山、こもれる大和し美はしー」とあるそうだが、こうして大和盆地とそれを取り巻く山々を俯瞰・遠望すると、「青垣」とはよく言ったものだ実感できる。矢張り美しい。

ツツジの狂い咲き。皇帝ダリアに違和感。きれいなトイレ

360度ひろがる景観とそれぞれに思い出のある山々を眺めながら、妻手製のおにぎりをほおぼり、柿をかじりながら休憩。

ソライロタケ・以前の夏二上山で→

植栽されたツツジの狂い咲きに哀れをおぼえ、展望デッキの高さまで伸びあがって





る皇帝ダリアに違和感を感じたりしたが、清掃された山頂広場と清潔なトイレに感心し、関係者に感謝しつつ山を下った。

ルート途中にある“亀の瀬”の解説パネル

ハイキングコースの途中に北側の大和川を見下ろせる場所があり、ここに図入りの大型解説パネルが設置されてあった。

大和盆地(平野)とそれを取り巻く山々に降る雨は、葛城川、曾我川、初瀬川、佐保川、富雄川その他の河川を伝って大和平野を潤し、大和川に集まって大阪湾にそそいでいる。流れ出るのは王寺からの一か所だけで、その注ぎ口にあるのが **↓タマゴタケ(二上山で)**

“亀の瀬”と呼ばれる地すべり地帯なのだ。ただでさえ水はけの悪い大和平野だが、ここで地滑りが起きると出口が詰まった形で大和平野は水浸しになる。

現地を見下ろし乍ら理解できる

↑キヌガサタケ(二上山で) パネルには過去に起こった大洪水の写真も張り付けられてあり、現地を見下ろしながら、地滑り対策工事の概要が理解できる。私たちが住む大和高田市も含めて、水害・水浸き問題は深刻な悩みの種、それだけに興味をひかれるパネルだった。



季語になるかアサギマダラの渡り



パソコンを何気なく開いたら「蝶渡るという季題」という表題のブログに出くわした。俳句に携わっておられる方のブログ。この方は「蝶渡る」という言葉を季題として詠んだ句が句会で取り上げられたことが「画期的」なことと喜ばれ、「ホトトギス新歳時記」の次回改定までに正式に「季題」として取り上げられるよう、頑張りましょうと呼びかけられておられる。2018年のブログなので、すでに実現したかもしれない。

門外漢からも大歓迎

私は「季語」と「季題」の違いも分からない全くの門外漢だが、この小さい生き物が大海原を越えて、遠く台湾や中国南部まで旅をする“壮挙”を多くの人たちが見守り、応援することには大賛成だし、いろんな形でこの蝶の魅力が人々に広がっていくのはうれしい事だ。

幼少期からの憧れの蝶

私は幼少期を長崎市で過ごした。近くの穴弘法山や金毘羅山は日常活動のフィールドで、夏になると鶏や兎の餌集めを口実に野山を歩き回っていた。ただ、このアサギマダラだけはこれらの山では見ることができず、金毘羅山山頂を越えてさらに歩いて「三ツ山」まで行かないと逢えなかった。憧れの蝶だった。

1980年代に渡りの調査が始まった

当時から移動する蝶だとは知られていたように思うが、渡りをするのが明らかにされたのは1980年代だったと記憶している。当時激職についていた私は新聞記事などで見て、その後の小中生も含む「ネットワーク調査」の進展に興味深く見守っていた。調査活動での大きな成果にはわくわくした。

そろそろ調査活動に終止符を と思うのだが

アサギマダラの魅惑的な生態が明らかになってきたのは嬉しいことだが、あの美しい翅に文字を書くのはやはり無粋。美しい蝶を自由にさせてほしい。

